特集 旅する神がみ

飾りたてた神輿に乗り、華やかな儀式をともなう神もあれば、闇夜に密やかに御旅所に出立する神もいる。旅先で歌舞音曲を楽しむ神もいれば、人びとの祈願に応える機会とする神もいる。それぞれの神さまの旅心はいかようなものだろうか

日本の文化展示・弘前ねぷたの見送り

『春日若宮御祭礼絵巻物』上巻 遷幸儀（江戸時代中期）〈春日大社提供〉

中牧弘允
民博 民族文化研究部
専攻は宗教人類学、経営人類学。善光寺のお膝元で育ち、日本の宗教を国内のみならず、ハワイ、カリフォルニア、ブラジルなど海外にまで追いかけている。

八月は民族大移動の季節である。お盆の帰省だけではない。東北三大祭もあれば、海外旅行もさかんだ。そして人びとが動くとき、ご先祖や神がみもまた移動する。

旅する神

日本の神がみは神殿に鎮座しているだけではない。時に神輿に乗って人間界に旅をする。祭りともなればお旅所がもうけられ、神社から神がみの御神幸がおこなわれる。御神体が隠されたまま移動するのである。他方、インドでも山車に乗ってヒンドゥーの神像が巡行する。カトリックの祭礼でもマリア像や聖人像が輿に乗せられ、行列を組んで教区をめぐる。だが、秘匿されることはない。

旅する仏

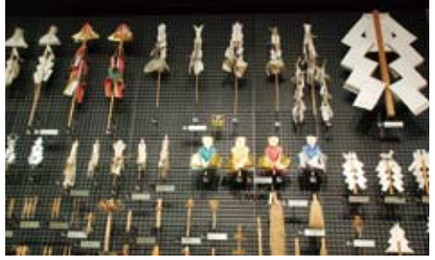
神だけでなく仏も旅をする。仏像はふつう寺院に安置されているが、江戸時代に盛んだった善光寺（長野市）の出開帳のように各地に出張することもある。じつは、旅に出るのは秘仏の本尊ではなく、その前に立つ「前立本尊」である。そもそも、秘仏というかんがえかたは仏教の本来の教義にはなく、むしろ神道の御神体の伝統に根ざしているとの指摘がある。

『善光寺縁起』によれば、本尊自体も百済から日本に渡来し、難波の堀から元善光寺（飯田市）を経て現在の地に安住した。ところが、戦国時代には川中島合戦の争乱に巻き込まれ、まず武田側によって甲府に移され、武田が信長に滅ぼされると岐阜に移動させられた。そして信長が本能寺の変にあうと、尾張の清洲に移転され、さらに家康によって浜松を経て甲府に戻された。

やがて秀吉が天下統一を果たし、京都の大仏殿が地震で崩壊すると、甲府から京都に迎え入れられた。しかし、秀吉の体調が悪くなると善光寺如来のたたりではないかと噂され、秀吉の死の前日、信州に送り返されたという。戦乱の時代、秘仏は流浪の日々を送っていたのである。

神仏と人びとの移動

日本の文化や歴史に潜む、旅になぞらえられる神仏の移動。また神輿や山車、あるいは「ねぶた」のような祭礼のつくりものが動くことで、社会や人びとも連動して活動的になる。そのダイナミズムを解き明かすのが本特集のねらいである。あわせて旅する神がみをひろくヒンドゥーやカトリックの祭礼にも求め、比較の糸口もさぐりたい。



日本の文化展示・祇園祭の幣（右上隅）

アメリカ展示・ペルーの輿とマリア像

南アジア展示・パールッタサーラティ寺院の山車

日本の文化展示・春日若宮御祭（おんまつり）の田楽幣

インドの山車

杉本良男（すぎもと よしお）
民博 民族社会研究部
専攻は社会人類学、南アジア研究。スリランカ、南インドにおいてナショナリズムと宗教・文化についての調査研究に従事。最近は映画・ファッション、津波災害復興などにも関心をもっている。

民博には、南インド、タミルナードゥ州マドラス（チェンナイ）にあるヒンドゥー教のパールッタサーラティ寺院のものと同形の山車が展示されている。複製とはいうものの、これはこれで本尊に魂を入れれば立派に実用に供することができるものである。実際の八割程度の大きさにつくってあるが、それでも天井につかえるほど大きい。こうした大きな山車は、とくに南インドや東インドに多くみられる。

パールッタサーラティ寺院の巡行用の神像

祭司がのった山車が町内をめぐる

パールッタサーラティ寺院の山車は、毎年四月から五月にあたるタミル月チッティライにおこなわれる一〇日間（一〇夜一一日）の大祭のときにひきだされ、町内を巡行する。

この時期の南インドは非常に暑い季節にあたり、各地で村の女神を祀る祭礼がおこなわれる季節でもある。ただし、山車にのせられる神さまは本尊ではなく、巡行用につくられたものである。町内を巡行する山車の勇壮なすがたは、京都祇園祭の山鉾巡行を思わせる。

大祭は寺院ごとに時期がちがっているが、一〇日間（一〇夜）おこなわれる例が多い。初日には旗揚げ式、最終日には旗納め式がある。期間中の何日かは山車が出て、町内をめぐる。山車には寺院つきの祭司がのり、人びとは祭司を通じてお供え物を神さまに捧げてお下がりをもらう。有名な寺院の大祭では一〇〇万単位の人びとが沿道に並び、周囲はすさまじい混雑となる。

山車の威力は宗教を超えて

このような大祭はヒンドゥー教に限らず、キリスト教やイスラームでもみられる。

二〇〇四年暮れに津波被害にあった州中央海岸部のナーガパッテヤナム市近郊にはウェーラーンガンニ聖堂（キリスト教）とナゴール聖廟（イスラーム）というインド全土に響く有名な聖地がある。ここではいずれも一〇日間の大祭が催され、そのうちの何日かは山車がでる。

ウェーラーンガンニでは、聖母マリアやイエス・キリストの像をのせた山車が出て、聖堂の周囲をめぐる。こうした大祭には、むしろヒンドゥー教徒が多く集まるといわれる。

ウェーラーンガンニ聖堂の大祭には例年一〇〇万人以上の見物が集まるが、二〇〇四年末の津波災害のあと、聖堂の周辺はとくに被害が大きく、巡礼客や観光客の足が遠のき、地元には大きな痛手となった。

町内を巡行する山車

起死回生を狙った地元の人びとは、聖堂の周辺に限られていた山車の巡行ルートを変えて、鎮魂の意味をこめて海岸をまわることにした。こうした努力が実ってか、その後聖堂には津波前を超える多くの観光客が集まるようになったという。宗教を問わず、タミルナードゥにおける山車の威力をまざまざとみる思いがする。

京都の祇園祭と御旅所

森田三郎（もりた さぶろう）
甲南大学文学部教授
一九四五年、京都府に生まれる。京都大学大学院博士課程修了。専門は文化人類学（農民文化論・映像人類学）。著書に『祭りの文化人類学』（世界思想社）などがある。

神輿には神さまが乗っているが、山車はふつう神さまに奉納する舞台装置なので神さまは乗っていない。元禄時代には神田祭、山王祭、三社祭などの江戸の著名な祭りには、神輿だけではなく、祇園祭と同様、豪華な山車のパレードが付随していた。しかし明治初期、神仏分離令が施行され、首都東京のお膝元では、華美な山車の随伴が無くなってしまった。

神人交感の機会を求めて 神輿に乗る神さまたち

京都の祇園祭では山鉾巡行が主役のように扱われてきた。山鉾巡行が行われる日（伝統的には先の祭りの日）に八坂神社から三基の神輿が出発し、氏子区域を回ったのち四条寺町の御旅所に到着する（神幸祭）。御旅所に神さまがとどまられている間に氏子の奉仕を受け、現在では花笠巡行の二四日（後の祭りの日）に神輿に乗って八坂神社に戻る（還幸祭）。つまり、ふだんは八坂神社内に居る神さまが、神輿に乗って御旅所に行き、氏子たちの奉納を受け、神人交感が行われ、神社に戻るというのが祇園祭の構造なのである。

山鉾と神輿との難しい関係

しかし、じつはことはそう単純でもない。祇園祭の山鉾は、神輿が到着する前に御旅所を通過してしまう。神が来られる前に場をお祓いするためだという説明がなされるが、神輿が通るコースはほとんど重ならないことからもわかるように、理屈に合わない。

天文二（一五三三）年、法華一揆のおりに、「神事が行われなくても山鉾巡行はやりたい」と下京六六カ町の世話役が申し出たことからもわかるように、山鉾を運行する側に神の前での奉納という意識が、もともと強くはないのである。

祇園祭が始まった貞観一一（八六九）年には、神泉苑に六六本の鉾をたてて疫病の退散を祈ったといわれているが、風流が盛んになり、後の山鉾巡行が行われるようになっても、とくに鉾には、天にいるカミに降臨してもらう依り代としての役割があった。鉾は、天にいる神がみがわれわれ人間の住む世界に来るための門でもあった。山鉾には、神がみが降臨する動く祭壇と解釈できる側面がある。月鉾には月読命（ツキヨミノミコト）が、霰天神山（あられてんじんやま）には天神が、南観音山には観音が、町の神として降臨しているとみなせるのである。

御旅所に入る前に神振りをする東御座
〈2009年7月17日撮影〉

左（東）から御旅所に鎮座した西御座、中御座、東御座、若御座　〈2009年7月17日撮影〉

神輿ごとにルートを違えて 賑やかに神輿の到来をつげる

御旅所が、現在の四条寺町に定まったのは、天正一九（一五九一）年の豊臣秀吉の命令による。それ以前は、少将井御旅所（冷泉東洞院）と大政所御旅所（烏丸高辻）の二カ所であった。

現在は、当初祇園祭が行われた神泉苑の南東の端（三条大宮東入ル）に、又旅所とも呼ばれる三条御供社がある。還幸祭のときに中御座、東御座の二基の神輿が安置され、神の依り代であるオハケがたてられ、奉餞祭が行われる。

ちなみに、三基の神輿には、主神素戔嗚尊（スサノヲノミコト）（中御座）、主神の妻、櫛稲田姫命（クシイナダヒメノミコト）（東御座）、その子である八柱の御子神（みこがみ）（西御座）が乗る。素戔嗚尊はインドの祇園精舎の守護神である牛頭天王（ゴヅテンノウ）や武塔神（ムタフカミ）と習合し、それに伴って櫛稲田姫命は牛頭天王の后の頗梨采女（ハリサイニョ）と、八柱の御子神は八王子、八将軍と習合していることは、よく知られているとおりである。

祇園祭も、時代の変化に応じて変容をしてきた。しかし、地上に駐留する神がみも天界に在住する神がみも、この期間、人びとの生活の場を訪れ、風流などの奉納を通して神人交感が行われ、人びとに疫病退散の御利益を与えるという構造には変わりはない。

青森ねぶた祭

三井泉
日本大学経済学部教授

専門は経営学、経営人類学。現在の研究関心は、経営理念の国際比較。共著に『会社じんるい学』（二〇〇一年、東方書店）、共編著に『経営理念――継承と伝播の経営人類学的研究――』（二〇〇八年、PHP研究所）。

真夏の日差しが和らぎ、青森の街に夕闇が迫る頃、勇壮なねぶたが小屋から一台また一台と通りに姿を現す。街には色とりどりの花笠を被り、揃いの浴衣に赤や青の襷をかけたハネトたちが鈴の音を響かせて集まってくる。日本中から詰めかけた観客たちは桟敷に陣取り、慌しく団扇を動かしながら、今や遅しと始まりの時を待ちわびる。

午後七時一〇分、花火の合図とともに一斉に囃子が鳴り響き、「ラッセラー、ラッセラー、ラセラセラッセラー！」のかけ声とともに、二十数台の巨大なねぶたが眠りから醒めてゆっくりと動き出す。待ちに待った「出陣」の瞬間である。

病気や災いを川や海に流す

ねぶたの起源は、夏の睡魔や疫病を退散させる「ねぶり流し」や「七夕」などに遡ることができる。人形や行灯に病気や災いを封じ込め、それを川や海に流すことによって厄を祓おうとした祭祀である。今日でも祭りの最終日「ナヌカビ」には、ねぶたを船に載せて青森湾を巡航する「海上運行」という形で、その名残をとどめている。

巨大行灯により見物人を集めたという記録は弘前藩の時代から残っているが、今日のような形になったのは、青森市の戦後復興を願った港祭りに端を発している。当初から町衆の力により人的、経済的に支えられてきた都市祭りであるが、とくに人形ねぶたの大型化とともに費用も巨大化し、今日では、一台の制作と運行にかかる費用は二〇〇〇万円以上にのぼるという。

経済効果は六〇〇億円

この費用を支えているのは、地元で商売をしている「お店」、つまり企業である。今日の青森ねぶたの大きな特徴の一つは、ねぶた人形の台座に企業名が掲げられ、ハネトの浴衣や法被にも企業名やロゴマークが目立つところにある。つまり、青森ねぶたには「企業の祭り」という側面もある。

観光客三一九万人（二〇〇八年八月二日～七日）、四九七億円（荘銀総研推計）の観光消費を生み、約六〇〇億円の経済波及効果をもつまでに成長した「巨大観光イベント」であれば、その宣伝効果を狙った企業のPR活動と考えるむきもあろう。

しかし、成長期ならばいざ知らず、今日のような不況期にあっても、なぜ企業はねぶたを支え続けるのだろうか。そこに「神」の霊力がある。つまり、祭りは企業にとって宣伝効果という以上に、地域共同体への貢献やアイデンティティを示す絶好の機会となる。さらに、企業が自らの継続性と健全性を地域に示し「無病息災」を共に祈る年に一度のチャンスでもある。そこにこそ、企業が祭りに参加するほんとうの意味がある、というのは言いすぎであろうか。

街中に睨みをきかせる「ねぶた武者」

社名を背負いねぶた小屋に詰めかける人たち

熱気と歓喜に包まれる大通り

午後八時過ぎ、囃子もハネトも観客も一体となって青森の大通りが熱気と歓喜の渦に包まれる。そのなかをねぶた絵の武者たちが街中に睨みをきかせ、刀や棍棒を振り回しながら駆け巡る。その荒々しさをもって街中の人びとの睡魔を払い、厄病を遠ざけ、災害を封じ込めようとするかのように。

一五年間通い続けているという観光客の一人に感想を聞かせてもらった。「こんなにも勇壮でかつ優美な祭りは世界中のどこにもありません。外国の友人たちに、日本にきたらぜったいに見るように薦めています」。

旅する神がみは、こうして、人の心を奪い、人びとを旅へと誘う。

目に見えず、耳で知る若宮神の旅

笹原亮二
民博 民族文化研究部

専門は民俗学、民俗芸能研究。最近は、九州各地の島々を巡り歩き、祭りや芸能の伝播や定着について考えている。

奈良の春日大社では、毎年一二月中旬に春日若宮御祭がおこなわれる。この祭りは、一七日の「御旅所祭」に、神楽・東遊・田楽・細男・舞楽、翌一八日の相撲・後宴能といった様々な芸能が演じられることで知られる。ちょうど同じ時期におこなわれる京都南座の顔見世を加えれば、古代から近世までの芸能を一度に総覧するよい機会となるので、関西に居を移す以前から何度か見物に訪れていた。

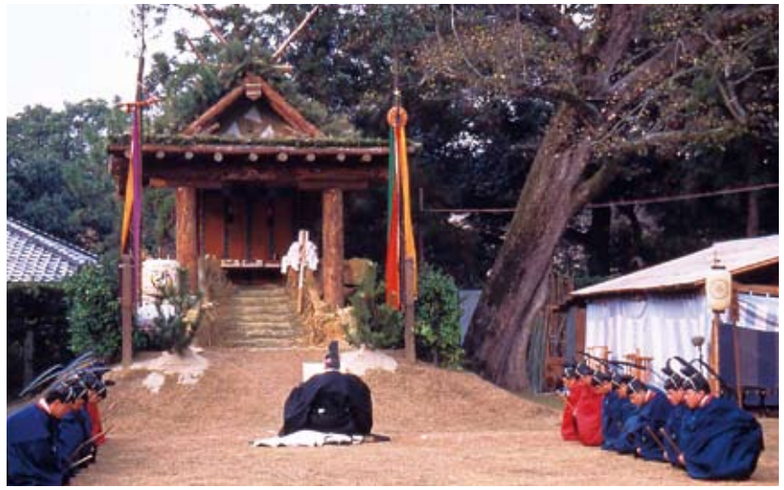
近年は、御旅所で芸能を見ている時間と茶店で一服している時間がほとんど変わらなくなってしまったが、以前は芸能の奉納にとどまらず、「宵宮祭」や「遷幸の儀」や「還幸の儀」などの重要な行事にも付き合い、見学していた。

白装束に囲まれた若宮神が暗闇を進む遷幸の儀

この祭りは、春日大社の本殿に祀られる神がみではなく、その御子神である若宮神の祭りである。普段は何もない御旅所に行宮を仮設し、若宮神を迎えて祭りがおこなわれる。

その若宮神を迎える行事が遷幸の儀で、一七日午前零時から若宮神社でおこなわれる。社殿での祭典の後、若宮神が大勢の神社の人びとに守られて行宮に遷る。

このとき境内は、いっさいの灯火が消されて真っ暗闇となる。したがって、参道を進む若宮神の様子をはっきりと見ることはできないが、若宮神を囲む人びとが間断なく発する警蹕や楽人の奏でる道楽によって、その歩みを参列者は明確に知ることができる。



春日若宮御祭「御旅所祭」での宮司祝詞奏上

春日若宮御祭「御旅所祭」での舞楽「落蹲（らくそん）」の奉納

写真はいずれも春日大社提供

そして、同日、祭りの参加者が社参する「お渡り式」、それに続く御旅所祭での芸能の奉納の後、深夜に還幸の儀が行われる。若宮神は、遷幸の儀と同様、一切の灯火が消された暗闇のなかを、取り囲んだ大勢の人びとが発する警蹕と道楽とともに若宮神社に還る。

見せないご神体の到来を音で知らせる

御祭の若宮神のように、祭りの際に祭場とのあいだを往還する、いわば「旅する」神がみは、御輿や曳山が出るほうぼうの祭りでも同様に見られ、必ずしも珍しいものではない。しかし、御輿や曳山による神霊の旅が、見物の衆目を集める可視的なものなのに対して、御祭では暗闇のなかでおこなわれているので見ることができず、そうとう趣きが異なる。

とはいえ、警蹕や道楽といった賑やかな音が伴い、人びとは耳で神霊の旅を明確に知ることができる点では両者は共通する。

こうした神霊の旅のありようの異同は、それぞれの祭りの歴史を考慮すると、目に見えず、耳で知る神霊の旅から、目と耳で知る神霊の旅へという、旅する神霊のありようの変化、あるいは、神霊の顕現に対する我々の意識や感覚の歴史的な変遷を示しているとも考えられて、興味深い。